

小学校低学年社会系教科における子どもの認識形成に着目した授業開発
—「まちたんけん」をテーマとした授業分析を手掛かりとして—

教科・領域教育専攻
社会系コース
藤井 時

指導教員 井上 奈穂

1 本研究の目的と問題意識

グローバル化や情報化社会など現代社会における急激な変化は、私たちの生活に多大な影響を与えている。それに伴い、学校教育では未来を生きていく子どもたちに必要な資質・能力を習得させる実践が着実に進められている。暗記やドリル学習とは違い、社会を生き抜くために必要な資質・能力は、学校教育の中で実践的に身に付けさせる必要がある。しかし、資質・能力の育成は、授業内容や方法にのみ目が向きがちとなり、子どもの学ぶ姿勢づくりを無視してしまう傾向にある。学びは積み重ねであるように、多様な資質・能力も積み重ねの上に成り立たせなければならぬ。

幼児教育と社会科や理科を学ぶ小学校中学年教育の中間点として位置する小学校低学年教育では、子どもの学びに対する姿勢の変化が数多く見受けられる。遊びから学びへの移行を意識した体験的な活動に焦点を当てた学習では、子どもの発見や気づき生まれるも、学びの基礎を築くには至らないことが指摘されている。そこで必要となるのは、子どもの認識形成に基づいた学びの実践である。

本研究では、生活科で生まれる「気づき」と社会科で育む「社会認識」の中間に「認識の芽」や「知的な認識」を位置づけ、生活科とそれに繋がる社会科との関連、連携、円滑な学びを考察し、「まちたんけん」をテーマに、生活科、社

会科の両側面から授業の提案をする。

2 小学校低学年における子どもの認識形成の位置づけ

生活科が課題としている体験的な活動の成果と各教科等への接続を認識形成の視点から明らかにすることで、「知的な認識」の重要性を示し、段階的な気づきの質的な高まりの仮説を立てた。仮説の中で、「気づきの体験」「体験の認識」「認識の習得」という段階から、子どもの資質・能力を獲得するための要素を示した。

また、先行研究から、小学校低学年教育における子どもの発達段階の視点と空間的な経験の視点について明らかにした。発達段階における空間的な経験から「まちたんけん」をテーマとした授業開発が子どもの認識形成において意義を持つことを示した。

3 児童の発言と授業進行に着目した授業分析 —中田小学校研究公開授業の場合—

前節で立てた仮説に基づき、平成24年11月22日に兵庫県小学校社会科教育研究大会の一環として、淡路市立中田小学校が行った研究公開授業を分析した。

子どもの目線を主軸とした授業実践を第1学年から第3学年まで同じ小学校において分析することにより、子どもの気づきの高まりには、段階を通しての高まりと個別的な高まりがある

ことを明らかにした。また、「まちたんけん」をテーマとした3つの授業分析の中に共通して「仲間分け」が行われていることに着目することで、各学年の特徴を整理し、「仲間分け」の有用性について明らかにした。

4 教師の意図とねらいに着目した授業分析 —兵庫教育大学附属小学校公開授業の場合—

認識形成に対する教師の意図やねらいを授業分析と授業者へのインタビューを通して明らかにした。

インタビューの結果、子どもが認識を形成するために、共通の経験ができる環境を提案すること、共有した経験を子どもに表現させること、子どもの思いや願いを社会科に焦点化することの必要性が明らかとなった。

5 小学校低学年社会系教科における子どもの認識形成

4つの授業分析とインタビューの結果から、認識形成の理論を示した。

理論における認識形成の軸は「概念化」であり、「概念化」の「共有体験」「言語共有」によって培われた認識を用いて、「社会的事象への焦点化」を行うことを示した。

第3学年の「まちたんけん」で社会的事象を扱う際に「認識の芽」を意識することで、小学校の全学年段階の社会科へと繋がる観点を待たせることができることを明らかにした。

6 小学校低学年社会系教科における子どもの認識形成に着目した授業開発—小学校第2-3学年の接続を踏まえた地域学習「まちたんけん」の場合—

理論を踏まえ、鳴門市鳴門町高島を事例とし

た「まちたんけん」の授業開発を行った。授業開発は、認識形成を踏まえた3つの提案から構成している。

提案①「気づきを体験する」学習活動では、「共有体験」を意識し、児童が様々な気づきを持たせる取り組みを提案した。

提案②「体験を様々な事象の見方・考え方として認識する」学習活動では、「言語共有」を意識し、児童の経験に即した仲間分けの学習活動を提案した。

提案③「認識を社会的事象の見方・考え方として習得する」学習活動では、「社会的事象への焦点化」を意識し、小学校社会科の全学年に繋がる提案をした。

また、第3学年段階における認識形成の評価の基準を学習内容と繋げながら明らかにした。

7 本研究の成果と課題

本研究における成果と課題は、以下のように挙げられる。

成果の一つ目として、子どもの認識形成の在り方を授業分析や授業者へのインタビューを通して、段階的な概念化という枠組みの下、理論化した点である。

二つ目として、「気づきを体験する」過程、「体験を様々な事象の見方・考え方として認識する」過程、「認識を社会的事象の見方・考え方として習得する」過程の学習活動を提案した点である。

三つ目として、子どもの認識形成に着目した授業の評価の観点を明らかにした点である。

また、課題として、子どもの認識形成の姿や多様な表現方法、そして教師による学習支援をより精査・整理する必要性が挙げられる。